

「気になる子」への保育援助をめぐる保育者の認識や戸惑い The Recognition and Embarrassment of Nursery School Teachers about Supports for “difficult children”

増田 貴人*・石坂 千雪**

Takahito MASUDA*・Chiyuki ISHIZAKA**

要 旨

東北地方の中規模都市において、保育所の保育者を対象に、「気になる子」への意識及びその対応に関する質問紙調査を実施した。その結果、以下の点が明らかにされた。第一に、保育者は、クラス内の集団生活を直接的に乱すことにつながる行動をとる子どもを「気になる子」と認識しがちな傾向にあった。その背景にはクラス単位の保育を志向する保育者の集団主義が影響していると示唆された。第二に、コンジョイント分析の結果、「気になる子」への対応の戸惑いを解消するための相談において重視されたのは「相談頻度」であった。保育者同士が気軽に相談し合えるような保育カンファレンス環境を、園内でどのようにつくっていくかが管理職に求められた。

キーワード：気になる子、保育者、相談頻度、コンジョイント分析

1. はじめに

近年の保育園や幼稚園の現場において、「気になる子」と表現される、いわば大人が意図的に働きかけようとするときに行動面でその大人に違和感をもたせる子どもに対して、保育者がその個別配慮や対応、具体的な支援方策について苦慮する現状が指摘されている(例えば中内・大石、2013)。

「気になる子」は、明白な知的障害や発達障害、身体障害に限らず、外国籍の子どもや養育環境に課題がある場合なども含み、包括的かつ曖昧な表現である。保育者によってあえてこのような表現が用いられている背景として、以下の点が考えられる(浜谷、1996)。すなわち第一に、統合保育の拡充によって、これまで保育方法を蓄積させてきた明白な障害児への保育援助や他機関との連携を、明白な障害があるとはいえないものの、発達になんらかの問題を感じさせる子どもに活かすことができるとは限らないということである。第二に、最も多く目にされる論調であるが、少子化・核家族化などに代表される急激な養育環境・子どもを取り巻く環境の変化によって、子ども像が変化したと捉える視点である。そして第三に、従来子どもの

問題行動は、子ども自身あるいは親の養育態度にその原因を求めることが多かった(例えば、唐牛・増田・橋本・菅野、2004)が、子どもと保育者との関係性を視野に入れ、気になる主体である保育者の見方とその変容も視野に入れた議論をしようとするものである。この議論については、身体的不器用さが保育者の子ども理解を歪めていた事例報告(増田・七木田、1999)や、「気になる子」がクラスという共同体の変容とともに「気にならなく」なっていく過程を分析した刑部(1996)の研究からも、その重要性が明らかである。

「気になる子」への保育援助については、田中(2008)が指摘するように、子どもへの対応を考えようとするときや、保護者の思いを汲み取ろうとするために、保育者チームとしての相互理解や相互支援がとても重要である。チームとしての対応が、保育者ひとりだけでは気がつかない子ども理解の歪みや視野狭窄となった保育の手立てを、客観的に助言・補完する可能性を含むからである。しかしながら実際には、「事例検討したいと思っても時間が無いといわれてしまう」「相談しても結局何も助言などもらえない」などの不満を耳にすることも多いように思われる。

* 弘前大学教育学部学校教育講座(特別支援教育分野)
Department of School Education (Special Needs Education), Faculty of Education, Hirosaki University
** 弘前大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, Hirosaki University

そこで本研究は、「気になる子」をめぐる保育者が感じる戸惑いや認識の実態を踏まえ、保育者が相談するときに重要視するものを明らかにすることで、保育者に対する助言・サポート体制をどう考えるか検討する一助としたいと考えた。本稿では、そのための保育者の意識調査を実施し、その結果を報告するものである。

2. 方法

(1) 対象と手続き

東北地方の中規模都市であるA市内の保育所に勤務する保育士を対象に質問紙調査を実施した。A市内の保育士による研究会を通して配布・回収を行った。配布数は130、回収数は102(回収率78%)となった。

(2) 調査内容と分析

調査内容は、以下の3つより構成されている。

①性別や年齢、保育経験年数など回答者の基本的属性(図1、図2及び図3)。なお回答者の98%が女性であり、また93%が現在担当のクラスがあると回答していた。

②「気になる子」について。佐藤(2007)の調査をもとに、「気になる子」の存在や戸惑いを確認する項目の他、保育士が気になると感じる15項目の子どものタイプの中から、1~5位まで順位付けして選んでもらった。

③保育士が求める相談体制について。倉盛・三宅・荒木他(2009)を参考に、保育者の相談体制について「頻度」「相談先」「対象となる子ども」「相談内容」の4要因に絞り込み、それぞれの要因に対していくつかの水準を作成した(今回の調査で設定した要因および水準を表1に示す)。これらについて、SPSS18.0を用

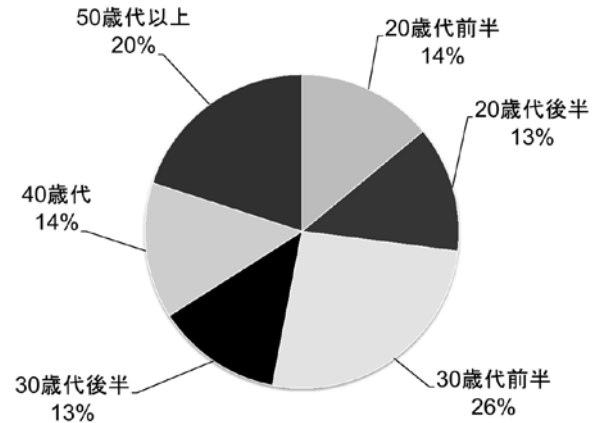


図1. 回答者の構成

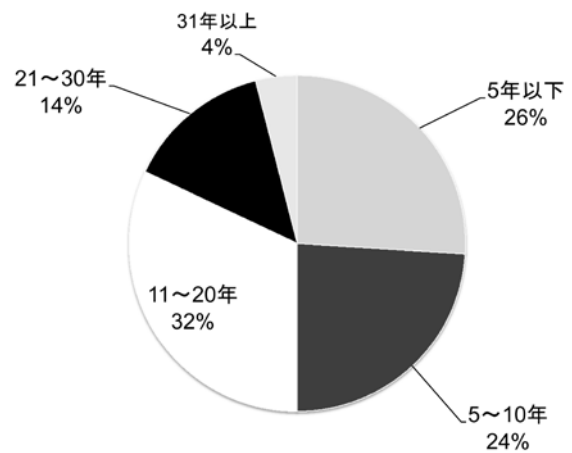


図2. 回答者の保育経験年数

いたコンジョイント分析法の手続きに基づいて18の組み合わせを検出し、回答の際は5件法にて得点化した。得点が高いほどニーズが高いことを示す。なおコンジョイント分析法は市場調査などでよく用いられ、回答者が持つニーズについて、重視されている要因を視覚的に捉えやすいことに加え、調査者が設定し

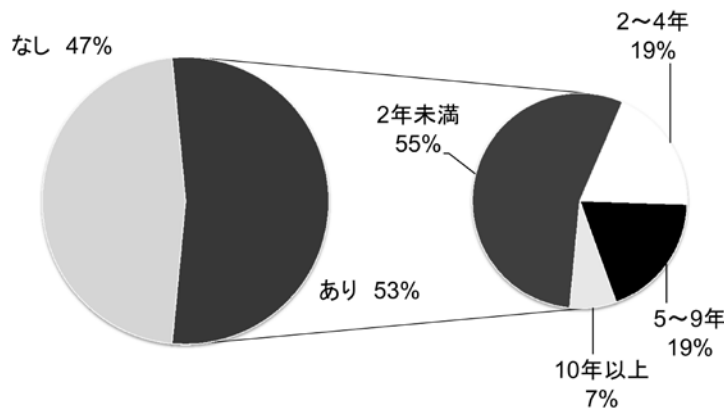


図3. 回答者の障害児保育経験 (左図:経験の有無、右図:経験があると回答した者のみ、障害児保育経験年数)

表1 回答者の保育経験年数

要因	水準
相談の頻度	あまりない(年2・3回程度) / 時々(月1回程度) / 子ども(週1回程度) / いつでも(毎日)
相談内容	就学/親とのかかわり/子どもとのかかわり
対象となる子ども	養育環境に問題ある子ども/気になる子ども/障害のある子ども/健常児(一般的な子)
相談相手(相談先)	専門機関/園長/主任

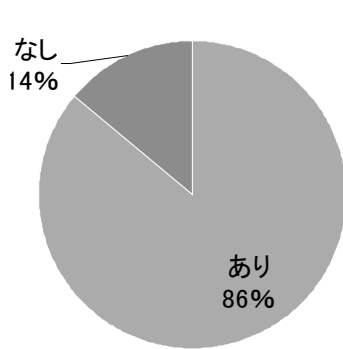


図4. 現在担当している子どもにおける「気になる子」の有無

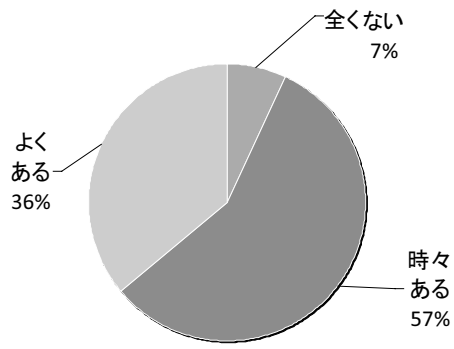


図5. 「気になる子」対応における戸惑いの有無

た要因と水準の組み合わせのシミュレートにより、調査結果の実現性が高いものとなる特色がある(真城、2001)。

(3) 倫理的配慮

A市の保育士による研究会の了解のもと、調査協力は利用者の自由意思であること、研究以外の目的でデータを使用しないこと、また、個人の情報が第三者に渡ることがないこと等の倫理面に関する事項を質問紙に明記したうえで、無記名での調査を行った。

3. 結果

(1) 「気になる子」についての認識

図4は、回答者が回答当時、主に担当している子どもたちのなかに「気になる子」がいるかについて、そして図5は「気になる子」に対応するとき保育援助における戸惑いを感じたことがあるかについて、それぞれ尋ねた結果である。

8割以上の回答者は、現在担当するクラス・子どものなかで「気になる子」がいると回答していた。さらに、その子どもへの対応について、戸惑いを感じたことが「よくある」「時々ある」をあわせると9割を越えていた。A市における大半の保育者が、日常の保育の中で、何らかのかたちで「気になる子」の存在を感じているといえる。

続いて、どのような子どもを「気になる子」として捉えているのか、その特徴を調べた(図6)。

多くの保育者が強く「気になる子」と認識したのは、「パニック・かんしゃくをよく起こす子」「友達や動物によく乱暴する子」「落ち着きがない子」のような、仲間に迷惑行為や暴力で働きかけて円滑な関係が築きにくかったり、日常の保育活動を直接的に妨害する行動につながりかねないような行動であった。特に「パニック・かんしゃくをよく起こす子」「友達や動物によく乱暴する子」の2項目は、1位としてあげた回答の大半を占めていた。一方、子ども自身が困るような発達の問題であっても、「不器用な子」や「親から離れにくい子」のような身体運動やおとなしさ・抑制的な特徴、あるいは「しゃべりすぎる子」「親から平気で離れる子」のように、その子の特徴的な行動が日常の保育活動を妨害するおそれの低いときには、「気になる」と認識されにくい傾向にあるようだった。

(2) 保育者のもつ戸惑いへの相談

図7は、回答者が相談の際に、「相談頻度」「相談内容」「対象となる子ども」「相談先」の4要因のうち、どれを重視すると回答したのかを示したものである。本研究におけるコンジョイント分析結果でのピアソンの相関係数は、 $r=0.998$ ($p<0.01$)であり、予測性が高い結果が得られたと判断できる。

回答者は、相談の際に「相談頻度」を最も重視しており、「いつでも」相談したいと考えていた。この水準は、頻度が高いほどニーズが高かったことを意味し

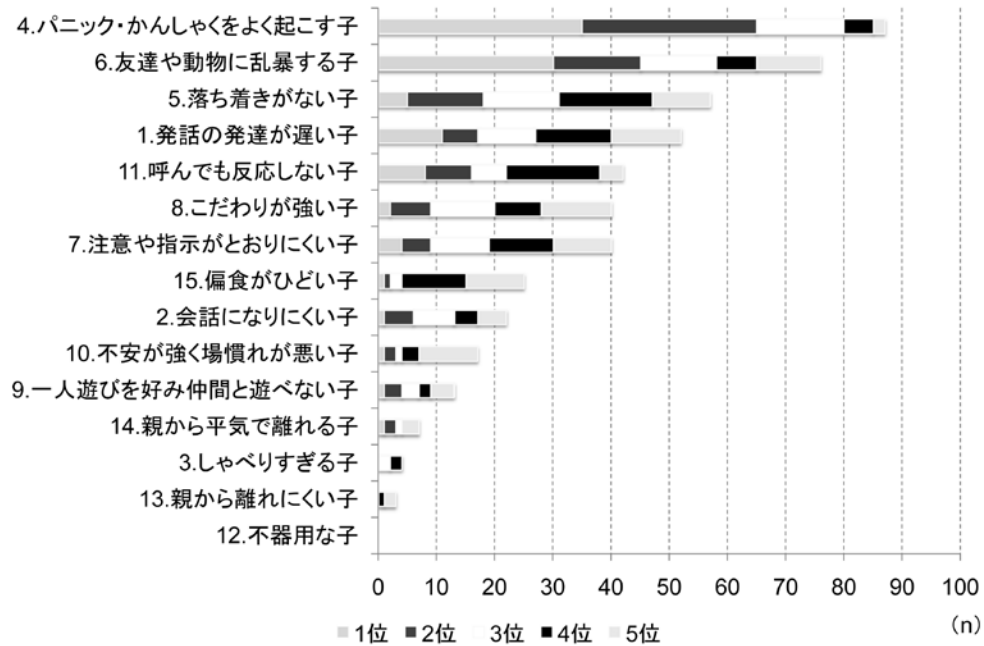


図6. 保育者が「気になる子」と認識する特徴（実回答数）

ている。他の3要因は低い値を示しいずれも同程度の値を示していた。「気になる子」をめぐる保育者の戸惑いの解消のためには、どんな相手にどのようなことを相談したいかよりも、どんな相手であれ相談できる機会が多いこと、それもできるなら毎日でも機会が設けられていることが最重要であるといえる。

4. 考察

本研究は、「気になる子」をめぐる保育者が感じる戸惑いや認識の実態を踏まえ、保育者が相談するときに重要視するものを明らかにする意識調査を実施し、その結果を報告するものであった。

本研究で、多くの保育者が回答した「気になる子」の存在や「気になる子」への対応における戸惑いは、先行研究（例えば七木田・水内・増田、2000）などでも同様にみられるものである。図3のような障害児保育経験も半数が無し、あるいはあったとしても大半が2年未満であった点についても重なっており、回答者の多くが保育経験の少ない若い保育者だったということも先行研究と共通する。だからといって、この多くの保育者が「気になる子」に対応する機会が増え戸惑いを感じている点について、単に保育経験が乏しいためとする議論は乱暴であろう。藤崎（2005）の指摘をふまえると、そもそも「気になる子」自体保育者が子ども像や問題像を整理できない存在であり、「気になる子」の存在が、保育者自身が保育経験に裏打ちされた自身の保育援助に対する自信の揺らぎを感じさせる

存在になっていると考えることもできる。水内・増田・七木田（2001）の指摘のように、「気になる子」が保育者にとって自分の日常の保育を捉え直す機会となり、自明の前提とされてきた子ども理解の再考につながる有意義な題材と位置づけることができる。

A市の保育所における保育者の多くが、「気になる子」の多くの特徴のうち、より強く認識するものとはそうではないものとの違いとして、集団活動の妨害につながりかねない行動をとるかどうかがあげられていた。幼稚園教育における集団主義を浮き彫りにした結城（1998）による幼稚園生活のエスノグラフィ研究では、集団性の低い子どもについて、「その集団性の低さゆえに、その個人のもつそれ以外の特性は活かされにくく」なっていく姿が描かれていた。そして、集団性以外には高い技能・能力をもっている、それらが集団性の評価を超えて発揮されることがなかったことを指摘している。つまり本研究の結果は、個々の子どもの実態を意識しながらもクラスという集団単位での保育を志向してきた保育者の集団主義が影響していると考えられる。そしてその集団主義自体が子ども理解を歪ませる一端を担っており、常に子ども理解を見直す機会を十分に確保することが重要となることを示唆している。

これを裏付けるかのように、子ども観や保育援助に戸惑いを感じたとき、本研究の回答者は、気軽に相談し合える高い頻度の機会を求めている結果が得られていた。

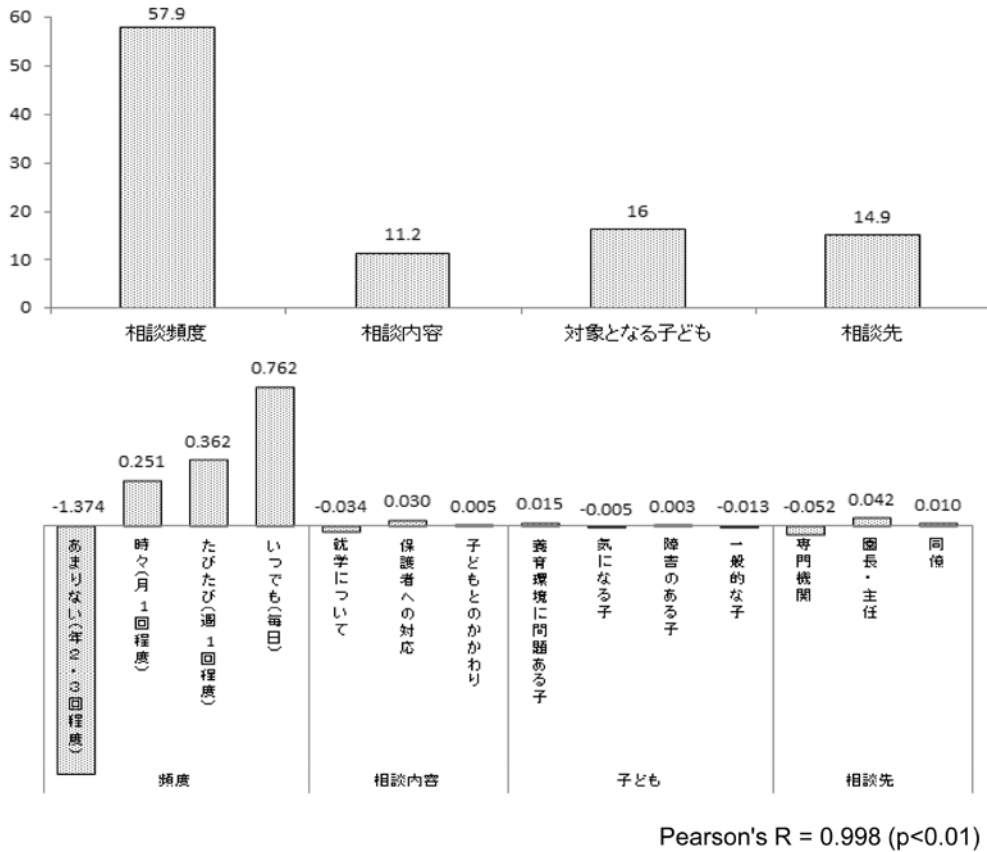


図7. 保育士の相談体制における需要度

一方で保育は、ともすると、理論はどうでもよいと実践に偏重する「ゆがんだ実践主義」が横行しがちでもあることはよく指摘されており（例えば太田、2005）、それは保育が独りよがりになってしまうだけでなく、保育者間の意思疎通や相互理解を阻んできたとも言われている。

園内での「気になる」という気づきを担任保育士だけにとどめることがないよう、「気になる」事柄について園内の共通認識を高めたり、多様な視点・考え方を提案する機会をつくったりするなど、保育者が自信をもって保育に臨めるようなサポート体制の確立が必要になってくると考えられる。かしまった検討会に限らず、ざっくばらんな雰囲気による保育者同士の談話や管理職である園長・主任によるこまめな助言・支援などの調整が、戸惑いの解消に効果的だと感じているということであろう。

付 記

本研究の実施にあたり、及川真実氏の協力を得た。また協力いただいたA市の研究会と回答者の皆様に深く感謝申し上げる。

文 献

藤崎春代 (2005) : 「気になる」とはどのようなことか (土谷みち子・太田光洋編著『気になる』からはじめる臨床保育—保育学からの親子支援—) . フレーベル館 : 222-243.

刑部育子 (1998) : 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 . 発達心理学研究 , 9 (1) : 1-11.

浜谷直人 (1996) : ちょっと気になる子の理解と指導 (茂木俊彦編「講座転換期の障害児教育第2巻 : 障害乳幼児の療育・保育」) . 三友社出版 : 201-224.

唐牛裕生・増田恭子・橋本多恵子・菅野幸宏 (2004) : 対応が難しい子の保育をめぐる協同の記録—学部—附属の一層の連携に向けて— . 弘前大学教育学部研究紀要クロスロード , 8 : 41-53.

倉盛美穂子・三宅幹子・荒木久美子・井上孝之・杉山弘子・金田利子・秦野悦子・廣利吉治・西川由紀子・坂田和子・山崎晃 (2009) : 保育支援の実態とニーズ—保育所・幼稚園と関係機関との連携のあり方— . 臨床発達心理実践研究 , 4 : 78-87.

増田貴人・七木田敦 (1999) : 保育園における「ちょっと気になる子ども」の観察事例に関する記述—不器用さの目立つA児の変容過程— . 幼年教育研究紀要 , 22 : 71-77.

- 水内豊和・増田貴人・七木田敦(2001)：「ちょっと気になる子ども」の事例にみる保育者の変容過程．保育学研究，39(1)：28-35.
- 中内麻美・大石幸二(2013)：幼児の身体の動きへの支援が身体像の描出及び行動表出に及ぼす効果．臨床発達心理実践研究，8：44-52.
- 七木田敦・水内豊和・増田貴人(2000)：保育者の子ども理解に及ぼす要因の検討—「ちょっと気になる子ども」へのかかわり方から—．広島大学教育学部紀要(第三部教育人間科学関連領域)，49：339-346.
- 太田光洋(2005)：終章(土谷みち子・太田光洋編著『『気になる』からはじめる臨床保育—保育学からの親子支援—』)．フレーベル館：244-254.
- 真城知己(2001)：SPSSによるコンジョイント分析．東京書籍．
- 佐藤忠全(2007)：幼稚園・保育所(園)における発達が気になる就学前幼児の支援と小学校への接続に関する研究．2006年度弘前大学大学院教育学研究科提出修士論文(未公刊)．
- 田中康雄(2008) 気になる子の保育Q&A—発達障がいの理解とサポート—．学研．
- 結城恵(1998)：幼稚園で子どもはどう育つか—集団教育のエスノグラフィー．有信堂．

(2013. 8. 5 受理)